

東京 IPO 特別コラム

2018年9月18日 Vol.129

迫りに欠ける9月前半のIPO市場

大型台風が西日本を通過したと思ったら北海道での大地震発生と今年の秋は私たちに自然災害の脅威を強く感じさせています。まずはこれらの災害で亡くなられた皆様のご冥福を心よりお祈り申し上げます。こうした悲しい出来事もあればテニスの4大メジャー大会の一つであるUSオープンで日本人初の優勝を遂げた大坂なおみ選手の快拳という嬉しい知らせもあり、悲喜こもごもの初秋を迎える中でこのところの株式相場も停滞を脱してポジティブな展開を見せつつあります。

頭重い展開が続いてきた日経平均が先週は一気に23000円台乗せを演じ、1月高値まで4%余りの水準に達したことで、投資家心理も多少は強気に傾きつつあるのかも知れません。一方で、TOPIXはなおも年初来高値から10%ほど下の水準で、マザーズやJASDAQ指数など中小型株指数についてはなおも15%~25%も下の水準に甘んじています。その後の米国株が相変わらず強展開が続く中で日本株も復活を期待したいところですが、日米貿易摩擦の激化懸念が足かせとなる中で中小型株についてはなおも迫りに欠ける展開です。こうした状況下で9月前半のIPO市場もやや迫りに欠けており、6日から13日にかけてIPOした4銘柄はいずれも初値から値を下げています。再上場の子供服専門会社のナルミヤ・インターナショナル(9275)や不動産関連の香陵住販(3495)に至っては公開価格すら下回っており、不人気ぶりと需給の悪さを示しています。

9月の後半は20日のテノ、ホールディングス(7037・保育所運営)、アズーム(3496・月極駐車場紹介サービス)を皮切りにマザーズ銘柄を中心に9銘柄が上場して参ります。10月も既に17銘柄が発表されており、IPO秋の陣が本格化しようとしています。市場の人気は業績の伸びが期待されるIT系、サービス系をはじめとした業種に偏りが感じられ、一般的なビジネス、ビジネスモデルに独自性のない企業の株価は不人気な状況が見られます。もはやIPO銘柄なら何でも良いという訳ではなく投資家の選択眼がシビアになっているということが言えます。それがIPO後の株価下落を見事に表しています。過去のIPO銘柄の命運はIPO後の業績が想定通り伸びていくかどうかにかかっています。想定を下回り先行きに対する不安感が台頭した場合の株価は大きな下落トレンドを描くことがあります。特にIPOしたばかりの企業の業績は先行投資期にある場合が多く、その点の理解がない投資家が関与している今のような株式相場は理不尽な株価下落を演じやすいので注意が必要になります。

そうした市場の動向を踏まえて株価の意識を強く持つIPO企業は新たな投資家を求め、IRに努めていく必要があります。IPO後の株価は成長に向けた企業の戦略をできるだけ多くの投資家、株主に理解を求めるIR活動で下支えされます。IPO企業は市場の停滞局面こそ成長戦略や利益還元の方角性をより一層投資家に示すべき

東京 IPO 特別コラム

ではないでしょうか。

(東京 IPO コラムニスト 松尾範久)